Ryosho-in Temple

良正院

本堂及び表門

京都市東山区

本堂｜江戸時代　寛永８年（1631）

表門｜江戸時代　前期

事業期間：令和元年６月～令和６年12月（予定）

良正院は、東山の山麓に伽藍を構える浄土宗の総本山知恩院の塔頭で、華頂通りに面し、神宮道を挟んで知恩院のすぐ西隣に位置しています。江戸時代の初め、寛永年間に、岡山藩主池田忠雄が、生母良正院（徳川家康の娘）の菩提を弔うために、在来の浩翁軒の寺域を広げて伽藍を整え、名を良正院と改めたものです。

本堂は寛永８年（１６３１）に建てられました。正面21・４メートル、奥行き15・６メートル、屋根は入母屋造、本瓦葺きの建物です。

表門は、薬医門と呼ばれる形式で、本瓦葺きです。本堂と同時期に建てられたとみられています。

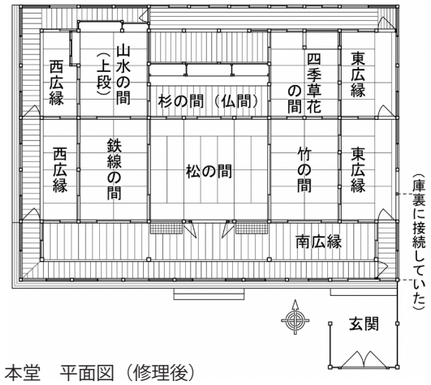
表門　修理完了

本堂　重文

《修理中》

内部を６つに区切ったいわゆる方丈型の本堂のつくりで、室の外部に広縁が廻り、南面東端に唐破風造りの玄関が取り付いています。

部屋のほとんどが畳敷きです。前側の３室は襖で仕切られるだけで、鴨居の上は開放されて一連の天井を張っており、大きな１室のように感じられます。中央の松の間の後方を仏間として本尊の阿弥陀如来を祀っています。西側奥の山水の間は、床を高めて格式を上げており、床の間、違い棚、付書院を備えています。



本堂　平面図（修理後）

建物には、非常に良質の木材が使われています。目に付く部分はヒノキ材ですが、その多くは木目の非常に緻密な材で、柾目という木目のまっすぐ通った部分を現しています。また、良正院の成り立ちを示すように、釘隠しの六葉金物や、襖の引手金物には、三葉葵が彫られています。

それぞれの部屋には、建てられた当初の襖絵がよく残っており、絵にちなんだ名で呼ばれてきました。良材を使った木太い骨組みと相まって格調高い雰囲気を放っています。絵は、当時の史料で「三益」が描いたと記録されていますが、この人物は狩野山楽の子伊織であるという近年の研究があります。

本堂　修理前　外観

本堂　修理前　内部広縁

修理の内容

柱が傾いていたため、瓦を全て降ろした後、小屋組を解体し、建て起こしを行いました。引き続いて、耐震性を確保するため、床下など見えない部分に補強を施しました。

傷んだ木部の修理、襖、金物、漆塗りなどの修理をしながら、建物の組み立てを進めています。

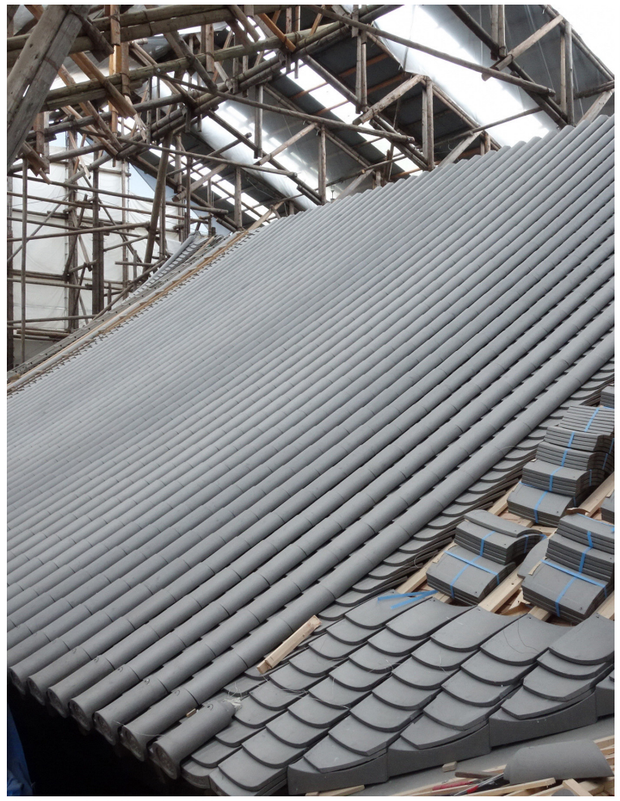
調査と施工への反映

修理と並行して建物の調査を行い、できるだけ多くの情報を集めながら、修理に活かしていきます。

玄関の屋根が当初はこけら葺きであったこと、建物の外周には大きな板戸がはめられていたこと、松の間に敷かれた畳が部屋の周囲だけであったことなどが、建物に残る痕跡等から確認されました。

今回の修理では、外周の板戸を復すなど、主要な部分を江戸時代の姿に戻していきます。

本堂　床下での耐震補強の状況



本堂　瓦葺き施工中の状況

本堂　小屋組み立て中の状況